

発見! おごおり遺産

No.7 石工と矢穴

今回のテーマは石工と矢穴です。これらを探してみると、地域の歩みを探るヒントになりますよ。



②薩摩街道干潟野越堤



③江戸時代中期～後期の矢穴



①吹上大通宮の鳥居と石工の名前



市

内に残る近世の石造物には、さまざまな種類があります。前回

お知らせした国境石などは古文書によって、いつ、どんな経緯で造られたか分かります。一方、神社や路傍の石造物には、製作者の名前や出身地などが彫られていることがあり、古文書に表れない当時の地域のつながりを知ることができます。

神社境内の狛犬や灯籠、鳥居などは素晴らしい芸術作品です。もちろん誰もが造れる訳ではなく、当時から特殊な技術者の仕事でした。それが「石工」

です。市内の江戸く大正時代の石造物で、石工の名前が彫られているものは120点以上を数えます。

上の写真①は、吹上大通宮の鳥居です。この鳥居は、幕末の嘉永7年(1854)に建てられ、柱には「小塩石工高浪磯七」の名前が見られます。また、三沢日吉神社境内の石祠には明治23年(1890)の銘とともに「小塩村石工高浪喜一」と彫られています。

「小塩村」とは、現在のうきは市浮羽町小塩に当たります。近隣の山北、袋野とともに多くの石工を輩出し、その

作品は筑後地方を中心に広く分布しています。

小郡市指定文化財「薩摩街道干潟野越堤」②は、平成28年(2016)10月に発見され、全国でも類を見ない施設として大きく報道されました。現在は道路工事も完了し、すぐ近くで見ることがができます。この野越堤は、薩摩街道を草場川の洪水から守るために江戸時代に造られたと考えられますが、現在まで古文書の記録を発見できていません。では、なぜ江戸時代の施設だと分かるのでしょうか。

それは、使用されている石に証拠があるからです。それが「矢穴」③です。江戸時代、大きな石を割って小さくする際は、まずノミで小さな穴をあけて、そこに鉄製の「矢」を打ち込む方法をとりますが、その最初にあける穴を矢穴と言います。矢穴は時期によって大きさが形が変遷することから、時期判断の際の基準となるのです。

身近な石造物も、さまざまな情報を持っています。皆さんも先人が残したヒントを探してみてください。

問合せ先 文化財課 ☎75・7555

おごおり遺産とは?》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産＝市民のたからのこと